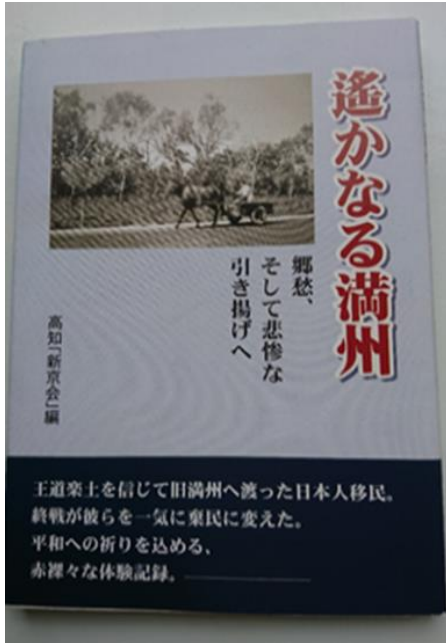


高知の「満州会」のことなど

崎山 ひろみ



新京会編 文集

「満州」といわれた国に生まれて16年ぐらし、日本に帰国して60年を経たというのに、私の中では、「満州」での暮らしの日々の方が、大きいのです。良きにつけ悪きにつけ、「マンシュウ」と耳目に入っただけで心が動くのです。この思いは在満の経験者の多くがいわれることです。なぜでしょうか。まぼろしの国だからでしょうか。

高知の「満州会」のはじまりは、山田一郎氏との出会いからです。1996年(平成8年)山田一郎氏(高知新聞社客員)が夕刊に「夕映え」—はるかなる「満州」へ—を連載されてから、私はさらに満州への想いが深くなり、毎日大変興味を持って読んでいました。その中で山田氏は私の家のすぐそばの西朝陽路に住んでいらしたことがわかり、何とかお目にかかって、お話したいと思っていました。

そのうち敷島高等女学校の先輩の柚村さんが山田さんと親しいことが分かり、お会いしたい旨、相談してみたところ、簡単にお会いできることになり、私は大喜びで出かけました。相手は著名なジャーナリストですから、最初はすっかりコチコチになっていました。

「どの辺に住んでいたのですか？ お父さんは何をしていたのですか？」「先生の住んでいらした国通独身寮のすぐ近くの協和会住宅です。総理官邸の前あたりです。」「ああ、そうですか、私は終戦近くまで、協和会担当記者だったのですよ。私の父は同郷ということで知っていたとの事。同じ住宅に池辺さんという方がいらして、山田氏は池辺さんに、とてもお世話になり、お宅にも何度か伺ったことがあるなど、いろいろ共通の話題がでてきて、すっかり気が楽になったことでした。

「池辺さんの娘さんとは小学校の同級でした。」と言うと、「ああ、可愛いお嬢さんがいらしたね」とよく覚えていらっしやいました。

そこで本来の目的の「満州のことを大人の目で、特に先生のようなジャーナリストとして見てこられた様々なことをお聞きしたいのです。私一人ではもったいないので、20～30人くらいで懇談会のような形で———」ということをお願いしました。すると山田氏は、「あなたと同じことを言ってきた人がいるんですよ、読んでごらんください。」と内ポケットから、1通の手紙を出されました。この手紙の主は2年下の錦ヶ丘高等女学校の池田さんでした。「このひとと話し会って、新聞の伝言板で呼び掛けたら、きっと何十人が集まるでしょう。」と言って下さり、早速新聞に定員30名ということで載せ

でもらったところ、すでに40名を超え、まだ次々と電話がかかってくるので、断るのに大変でした。当日は池田さん、福留さんはじめ、満州には関係しない方までお手伝いをいただきました。

“山田一郎氏を囲んで「満州」を語る会」は会場いっぱいになり、「満州のことは家族に話しても分かってもらえないし、なかなか聞いてくれない。」

「満州の話を知りたい。」

「満州のことを語り合える友人が欲しかった」

などなど、「満州」に対する深い思い入れのある方ばかりの会となりました。3時間はあっという間に過ぎ、「ぜひ、また開いて下さい」という要望が多くありましたが、再び集まる機会もなく、2年が過ぎました。

1998年、映画「葫蘆島大遺返」ができ、高知でも上映しようということになりました。懇談会の時親しくなった方や残留孤児帰国者の多い地区の潮江南小学校の校長先生や先生方が協力して下さることになり、やっと実現にこぎつけました。当日は午後から3回上映でしたが、140席の会場に600人の方が押し寄せてきたのです。1回、2回目などは満員電車なみでした。お年寄りや病弱者もいらっしや、私たちは、うれしい反面、冷や汗ものでいた。でも、アンケートには、名前・住所入りで「ぜひ引揚者と話しができる集まりを」という要望が400枚近く集まりました。また、ロビーでは、引揚後の再会など、あちこちでドラマがあり感動的でした。

その年の暮れ、山田氏を会長に10人の世話役で、とうとう第1回「満州会」を開くことができました。「満州」を使うことはためらわれていたのですが、お年寄りが多く、その方が分かりやすくてよいのではないかと意見に納得しました。結局、正式にできた名簿は200余名で、参加者は約100名でした。会では、山田氏に興味深い満州各地の終戦前後の関東軍の動きなどのお話しをしていただき、それから昼食。その後は壁に貼った大きな満州地図や満州関係の資料や図書などをみながら、各自、自由に懇談をしました。満州会の会合が、毎年1回となってゆきました。

3年間満州会の活動が続きましたが、世話役の方が高齢でもあり、病気になったり、亡くなったりで運営も大変になりました。また、各都市ごとの会ができて、各々の絆も深まってきましたので、「満州会」は、最後の会として、思い出に中国人の歌手の李広宏に出席いただき、日本や中国の心に響く歌を聴くことができました。

現在は、「新京会」、「奉天会」、「撫順会」、「ハルピン会」、「牡丹江会」などが、毎年会合をもっています。会報を出しているところや、集まってギョウザを作ったり、旅行をしたりとそれぞれの絆が深まっているようです。

この間、山田一郎氏をはじめ、多くの方々からのことを教えていただきました。私たちの体験とその後いりえたことなどを、ひとりでもおおくのひと達に語り、子や孫たちやアジアの人々に、再び戦争の悲惨な思いをあげあわせないために、この文集「はるかなる満州」郷愁、そして悲惨な引揚へ、(高知新京会編)が、意義あるものとなりますように願っています。(文集より、2006. 12 記)